

## 7. 三谷小学校と地域

堀 川 美 和 子

- I. はじめに
- II. 三谷小学校の変遷と児童数の変化
- III. 三谷小学校の取り組み —「おらが町の学校作り」
- IV. 地域の取り組み
- V. 考察

### I はじめに

三谷地区での調査の際、地区内を歩いていても子供の姿を見かけることはあまり無く、子供達で遊んでいる光景も目にすることがなかった。そのため、子供達が集まる小学校について聞いてみたところ、三谷小学校が様々な取り組みに熱心に関わっていることを知り興味を引かれた。2002年度より全国の小・中学校で「総合的な学習の時間」が本格的に実施されるようになり、三谷小学校も現在、総合学習として新しい活動に取り組んでいる。「総合的な学習」はこれまで画一的といわれてきた学校の授業を変えて、学校がそれぞれ創意工夫を生かして特色ある教育活動が行える時間としている。また、子供達に自ら学び考える力などを身に付けさせ、よりよく問題を解決する資質や能力を育むというねらいがある。現在三谷小学校もその一環として、ふるさと教育を軸とした地域を学ぶという活動に取り組んでいる。その中で学校は、地域と密着した「壁の無い学校」を目標として掲げている。ここでは、三谷小学校が取り組んでいる「総合学習」や地域の取り組みについて言及し、それらと地域や子供との関係、影響について考察していく。

ここでの「子供」とは、「三谷小学校の児童」を指す。なお、調査では子ども自身に直接聞くことは困難であり、親や祖父母の世代から話を聞くことのほうが多かったため、今の子供の姿とは主に親や祖父母など地域に住む大人の目を通した「子供の姿」であることを先に述べておく。

## Ⅱ 三谷小学校の変遷と児童数の変化

三谷小学校の創立は1877（明治10）年であり、それまで三谷地区の子供は、加賀市南郷町にある浄泉寺を借り受けて開校されていた南郷小学校へ通学していた。1877年曾字、直下、日谷に南郷小学校の分校が設けられ、同年10月、直下に新校舎を建設、三溪小学校となった。1892年現在地に移転し、その後三谷小学校と改称され、三谷中学校が併設された。1959（昭和34）年より細坪地区は三谷小学校下より分離、大聖寺地区の錦城小学校下に加わることとなった。また同年、学校統合のため三谷中学校は廃止され、三谷地区の中学生は錦城中学校に通学することとなった。そのため現在、三谷小学校は三谷地区内における唯一の学校であり、細坪を除く地区内全ての児童が通う、地域の人々にとって愛着のある学校である。

表1 三谷小学校の児童数の変化

年度	1984	1989	1994	1999	2002	2003
入学生数	21	23	14	12	8	5
卒業生数	21	21	23	14	13	14
全児童数	150	132	101	87	73	63

出所：三谷小学校の児童数の推移

表2 三谷小学校の学年別児童数（2003年度）

学年	男	女	合計
1	0	5	5
2	3	5	8
3	6	7	13
4	9	2	11
5	5	7	12
6	8	6	14
計	31	32	63

出所：三谷小学校『学校管理運営計画』（2003年度）

表1は三谷小学校の児童数の変化を示したものである。最大児童数は1957年の266名であった。しかしその後、児童数は年々減少し、1971年には98名となった。1973年、三谷地区の児童減少を食い止めるため、また若い夫婦などの定着、転入を目的として「美谷が丘」団地が建設された。この建設によって小学校の児童数は徐々に増え、1979年には120名を超えるに至った。その後は1983年の152名をピークにまた年々減少してきている。1990年代後半に入ると全児童数は100人を切り、

入学生数が一桁台の年度も見られるようになってくる。現在は、各学年 1 クラスの構成になっている。表 2 は 2003 年度の学年別児童数を示したものである。表 2 から見ても近年の入学生の減少は著しく、今後数年も児童数は減少していくと推測できる。

### Ⅲ. 三谷小学校の取り組み —「おらが町の学校づくり」

#### 1. ふるさと学習

三谷小学校では「ふるさと学習」を総合的な学習の中心においている。総合的な学習の時間は知識を教え込む授業ではなく、自ら学び自ら考える力の育成と学び方や調べ方を身に付けることがねらいとなっている。この「ふるさと学習」は、三谷地区の豊かな自然や文化・民俗・歴史を知り学ぶことによって地域の人々の生き方や文化に触れ、子供達に自分自身を見つめてもらおうという目的のもと 2000 年度から始められた。3 年生以上を学習対象とし、週 3 時間ずつ行なわれている。内容としては、3、4 年生が「川とともだち」、5、6 年生が「三谷のここがすばらしい」というテーマを掲げ、自分達の調べたいことをグループに分かれて調査していくという体験活動である。2003 年度の活動では、3、4 年生は三谷地区内の川へ出向いて、生息する動物や植物を調査したり川遊びを体験するなどした。また、3 学期には「九谷焼ってなかに」をテーマとし、調査活動を行なっている。

表 3 に、5、6 年生が 2003 年度に「三谷のここがすばらしい」のテーマに基づいて調査、発表をしたテーマと内容を示す。

これらのそれぞれのテーマは、児童達自身が三谷の「素材と人」を通して自分達で興味のあることや調べたいことを見つけて決めている。児童たちは 1 学期から計画を立てて活動調査をし、2 学期に三谷屋台村という発表会（後述）で調査内容を発表する。活動調査では三谷地区の人たちにインタビューをしたり、それぞれが調査するテーマについて体験活動をするなどしている。児童達にインタビューを受けた A 氏（60 歳代、女性）は「インタビュー内容をきちんと項目立てにして、丁寧な言葉づかいで質問してくれた。自分のよく知る昔のことを子供達に知ってもらうことはとてもうれしい。それに、昔のことを思い出して話している時間はとても懐かしく、楽しいものだった。」と語っている。また、A 氏から子供達が丁寧に書いたインタビュー依頼の手紙とお礼の手紙を見せていただいた。

三谷屋台村はこれらの調査結果の発表会として 2 学期に開かれる。児童に発表の仕方を身に付けさせるとともに、児童同士が異なるテーマの発表を聞いて三谷のよさを詳しく知るという目的がある。また、児童の保護者や三谷の人々も自由に見に行くことができる。2003 年度に行なわれた三谷

屋台村では、加賀市内の学校の教師も含め多くの人が児童の発表を見にやって来たので、児童たちは同じ発表を4、5回も行なったという。

表3. ふるさと学習「三谷のここが素晴らしい」のテーマと内容（2003年度）

テーマ	内容
「草花探検隊」	三谷地区にある草花の調査、草花を使った作品作り
「楽しいウキウキ竹細工」	竹を使った小物や楽器作り、作った楽器の演奏
「パーフェクト地蔵ファイル」	三谷地区内にある全ての地蔵を調査 地蔵について詳しい人へインタビュー
「温泉物語」	三谷地区にある温泉に入って回り、それぞれを比較 温泉の歴史を調査
「死乃苦端のなぞを探れ」	死乃苦端とは何をしていた場所かを調査 「死乃苦端」という名の由来を調査
「有名人の里三谷」	三谷地区の有名人を詳しく調査 有名人を良く知る人へインタビュー
「洞窟パラダイス」	三谷地区にある洞窟探検、生き物探し 洞窟について三谷地区の人へインタビュー

出所：三谷小学校『学習指導案—豊かに表現できる子を育てる』2003年

三谷小学校では「ふるさと学習」を実施していく中で地域と深く交流し、地域のよさを確認するという点を重要視している。また「開かれた学校—おらが町の学校づくり」をキーワードとして地域と密着した学校づくりを目指している。そのため三谷屋台村などのように、地域に向けて開かれた発表会や活動を多く行っており、次に示す取り組みも「おらが町の学校づくり」を重要な目標として行なわれているものである。

## 2. 土曜クラブ

2002年度からゆとりある生活の中で学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ、子供たちに生活体験や社会体験を経験させ、自ら学び考える力や豊かな人間性などの「生きる力」を育むことを目的として完全学校週5日制が実施された。三谷小学校では、2000年度から土曜に行なっていた「まちの先生」によるクラブ活動を、土曜が休日になっても土曜クラブとして継続することとした。このような活動は、子供が自分達の裁量で何をしようかと考え、平日にはできない豊かな体験活動に打ち込めるゆとりを作ろうという考えで始められた。大体年間に10回程度、三谷小学校と地区会館にて10時～11時半の時間に行なわれており、1年を通して子供達がそれぞれのクラブで1つのことを習得していくということが主な目的となる。指導は「まちの先生」と呼ばれる専門技術や知識、

経験を持った地域の人々と、それをサポートする教職員によって行なわれている。表4に2003年度の土曜クラブの内容と参加児童数を示す。

表4 土曜クラブの内容と児童の内訳（2003年度）

クラブ名	クラブ員
三谷の歴史	6年3人・5年1人
囲碁	6年1人・5年3人・4年2人
フラワーアレンジ	6年1人・5年4人・4年1人
グランドゴルフ	6年3人・3年3人
抹茶	6年1人・3年4人
写真	6年1人・5年1人・4年1人
木工作	6年2人・5年1人・4年2人
能楽	3年3人
昔の遊び	3年3人・2年2人・1年5人
お茶の会	3年1人・2年5人・1年3人

出所：三谷小学校『土曜クラブに大集合！！』2003年度

表4に示されるそれぞれのクラブは児童の希望によって選ぶことができるが、1、2年生は習得することが困難なものがあるので、昔の遊びとお茶の会のみとしている。この中で抹茶クラブだけは三谷地区外から講師が指導に来ているが、それ以外のクラブは三谷地区の人が「まちの先生」となり、指導にあたっている。具体的な内容として、三谷の歴史クラブでは地域の方言についてなど、三谷地区独自の文化や歴史に触れる。三谷の方言の回では、方言がたくさん書かれたプリントが子供たちに配布され、「まちの先生」が1つずつ意味や使い方などを説明した。「まちの先生」と教職員と子供達が話しながら進められ、少人数でも楽しく盛り上がっていた。

また昔の遊びでは竹馬、竹とんぼ、水鉄砲などをして遊ぶ。ある回では足や背中に瓦を乗せて運び、相手陣地の瓦にあてる「瓦あて」という遊びなども行なっていた。しかし昔の遊びというと、そのほとんどが昔は子供達自身が小刀などで削って作った道具を使用した遊びであるので、実際には安全性の問題があり、子供たちに製作を体験させることは難しい。また、昔は男女別の遊びが多かったため、男女が同時に楽しめるような遊びを探すことが大変だという。

土曜クラブの第10回では三谷地区会館で「まちの先生ありがとうの会」が開かれ、児童達が1年間ボランティアで指導してくれたお年寄りらに、寄せ書きした色紙を贈るなど感謝の気持ちを伝える。児童たちは竹馬や竹とんぼを使って上達ぶりを先生に見せ、先生側はこれに対して激励の言葉を贈った。「まちの先生」の中には「毎月クラブで子供たちに教えていくことはなかなか難しいので

大変なのだが、ありがたいの会などで子供たちに色紙をもらったりすると、つい来年度もがんばらなくてはという気になってしまう」と話す方もいた。実際に土曜クラブに参加している子供たちに聞いてみると、クラブを楽しみにしていると言う子供は多く、クラブの雰囲気も非常に和気あいあいとして楽しく感じられた。ある保護者は、子供は毎月クラブを楽しみにしており、クラブから帰ってくるとその日教えてもらった内容を毎回うれしそうに話すので、子供の心にいい影響を与えているのでは、とも言っていた。また一方では、子供たちは、家族のほとんどが家にいる土曜日に出かけることを面倒くさがっているという意見もあった。しかし、クラブに出かけること自体は面倒くさがっていても、学校に行ってしまうばとても楽しそうに活動しているということで、クラブの内容自体は子供にとって興味を持って楽しめるものなのだろう。

以上が土曜クラブの主な内容であるが、様々な問題点もある。それらの問題点について話し合う場として、2002年度から年に何回か「土曜クラブを考える会」が開かれている。この会では「まちの先生」と教職員が集まり、反省点や問題点について話し合ってきた。問題点としてはまず、子供達が技術や知識を積み上げるためにはクラブの回数が足りないという意見が出されたが、ボランティアで指導を行なっている「まちの先生」側には、毎回の内容を考えるのが大変で回数が多くなるのは困るという人も多い。そのため2003年度からクラブの回数については変更されていない。また、「まちの先生」や教職員に任せきりになるのではなく、保護者がサポートとしてもっと参加するべき、という意見も多く出された。これを受けて、2003年度からは保護者も自分の子供が所属するクラブに交代で参加し、「まちの先生」をサポートすることになった。三谷小学校としては、保護者も参加することによって土曜クラブをより「地域のクラブ」として盛り上げて行き、「おらが町の学校づくり」へもつなげていこうと考えている。保護者の都合が悪い場合は保護者間で交代するなどの調整をしており、積極的にサポート要員として参加をしている保護者も出てきている。しかし保護者側としては、平日に働いていると土曜は家にいたいという意見もあり、積極的に「地域のクラブ」として盛り上げていくには難しいようである。

### 3. フリー参観日

2002年度から三谷小学校では、大体毎月第4水曜日の午後をフリー参観日としている。フリー参観日には全校集会や学年集会があり、子供達の学習発表会が行なわれるので、保護者は学習の成果を見ることができる。また、給食の様子や休み時間の様子、授業参観も含めて子供達の学校生活をフリーに参観できるようになっている。そのため保護者にとっては、授業だけでなく学校全体の様子を見て回ることができて好評である。それにほぼ毎月開かれているので、仕事の忙しい保護者も都合を合わせやすい。

学校側は、子供達の親だけでなく、祖父母などにも参観に来てもらえるよう積極的に呼びかけて

いる。また「おらが町の学校」として、学校に子供が在籍していない地域の広い範囲の人々に対しても、気軽に学校の様子を参観してもらいたいと呼びかけている。子供達の祖父母の場合は、孫のがんばっている姿を見に行きたいと積極的に参加する人も多いようだ。しかし、学校に子供が在籍していない場合、なかなか参観には行けないという意見が多く聞かれた。三谷小学校に子供が在籍していない人に話を聞いたところ、B氏（60歳代、男性）によれば「小学校に自分の子供がいた頃は、学校が行う様々な活動に関心があったが、今では身近な存在ではないし興味を持っているとは言えない。」とのことである。C氏（50歳代、女性）は「毎月、小学生のいる家庭もいない家庭も関わらず三谷地区全戸に小学校の広報が配られる。それらを見て、学校が行っている活動や地域に開かれた学校づくりへの取り組みにはいつも感心している。でもやはりうちの家庭にはあまり関係の無いことに感じてしまうし、学校へ気軽に出かけるというのは難しい。」という。またD氏（70歳代、男性）は「昔とは違って、今は三谷で子供を見てもどこの誰かほとんど分からないし、小学校の先生方も異動されたりで知り合いも少なくなってきた。なかなか簡単に学校に遊びに行こうという気持ちにはなれない。」と語っている。子供が小学校に在籍していないなどあまり学校に関わりのない地域の人々の多くは、積極的に学校と関わっていくことは難しいと考えており、実際に活動への参加はほとんどしていないようである。

#### IV. 地域の取り組み

2002年度から三谷地区の一部の人々によって、子供たちに命を見つめなおす場として「土曜学校」が開設されることとなった。毎月第1土曜に9時から11時の間三谷地区会館で行なわれる。対象は小学校1年生から6年生の児童で、会場費や保険料として1人につき年間1000円の会費を集めている。この「土曜学校」への参加は自由であり、2002年度は20人、2003年度は16人の子供達が参加した。内容は、浄土真宗における親鸞の教えを若い世代に少しでも伝えたいとして、寺の住職による法話、畑での農業体験などが行なわれる。また「土曜学校」は、頭を良くする学校ではなく命の大切さについて教える場とされている。次に、表5として2003年度の三谷地区土曜学校行事予定表を示す。

表5の「お話」とは法話のことである。また「花祭り」とは釈迦の誕生を祝う行事であり、4月5日は三谷地区会館において、29日は大聖寺教務所にて行なわれた。「花祭り」では、お堂を花で一杯に飾り、ろうそくをともしたり釈迦像に甘茶をかけたりする。また、釈迦懐妊を告げたと伝わる白い象の作り物を子供達が引く「白象行進」や念珠の手作りなどが行なわれる。「あいがもの試食」は、地区内の農家が有機農法を行なっている水田で飼育しているあいがもを収穫後に試食するとい

うものだが、2003年度には保護者の了承を得ることができず断念したとのことである。これらの活動を進めているE氏（70歳代、男性）は「自分達が食べ物をいただくまでには命の存在があり、過程がある。この例として農業体験と同様、子供たちにあいがもを解体して食べるという体験をして欲しい。少しでも命の大切さが伝わって、大人になった時に思い出してもらいたい。」と述べている。また、参加する子供のために、読経に必要な本や数珠などは「土曜学校」側で準備している。子供だけでなく保護者の参加も歓迎しており、積極的に行事に参加する保護者も出てきているという。孫が土曜学校に参加しているというF氏（60歳代、女性）は「自分達が幼い頃にも、仏教の教えや命の尊さについて教えられたことがあり、はっきりとではないが今になっても思い出されることがある。子供たちは土曜学校に出かけるのを面倒くさがる時も多いが、命についてきちんと考えるまではいかなくても、小さい頃に体験することは良いことだと思う。」と述べている。しかし、「私自身が実際に参加するのは、気後れしてしまってなかなかできない。」とも言っている。

表 5. 三谷地区土曜学校行事予定表（2003年度）

4/5	入校式・移動花祭り
4/29	花祭り
5/3	憲法のお話
6/7	お話・小遠足
7/12	じゃがいも掘り
8/2	お話・ゲーム
9/6	お話・ゲーム
10/4	さつまいも掘り
11/1	あいがもの試食
12/6	報恩講
1/10	新年会
2/7	お話・ゲーム
3/6	終了式

出所：2003年度 三谷地区土曜学校行事予定表

また三谷小学校としては、宗教的な内容であるため「土曜学校」の活動を一緒に行なうことはできないが、宗教心を持つことはとても大切であるとし、子供たちに良い影響があるだろうと考えている。



## V. 考察

ここでは以上のような三谷小学校と地域の取り組みが、地区内の子供や三谷地区そのものにどのような影響を与えてきているのかを述べ、それらが地域に根付いてきているかについて考察する。

これまで三谷小学校が取り組んでいる様々な活動について見てきたが、その多くが「おらが町の学校づくり」へのステップであったりふるさと学習であったりと、三谷地区に密着した活動であった。三谷小学校がこうした取り組みに活発に関わるようになったのは2000年頃からだ。それ以前は子供を育てていくのに家庭と学校がはっきり分けられ、学校では勉強を教えるものであるという認識が強かった。しかし、総合学習という枠組みが作られたこともあり、三谷小学校では学校と家庭そして地域も連動して子供を育てようという考え方や活動を示してきた。実際に、地域の中でもこのような活動に積極的に参加する人々が増えてきているのは、「地域の中で子供を育てる」という動きに影響を与えられているためだと見てとれる。三谷地区の「土曜学校」が開設されたのも、このような動きに少なからず影響を受けているように思われる。

このように、三谷地区では、子供たちにふるさとをよく知り考えさせようという活動が活発化してきている。なぜ今大人達がこのような活動に熱心になってきているのだろうか。ひとつには、その活動自体が大人たちの生きがいにもなっているためであろう。特に「土曜クラブ」の「まちの先生」である高齢者の人々は、毎回の内容を考えるのが大変であっても、子供達と会えることを楽しみにしている人が多いようである。「まちの先生」であるH氏(70歳代、男性)は「内容については毎回悩むが、自分の教えたことを子供達が楽しんでくれたりするとやはりうれしい。」と語った。実際、私には「土曜クラブ」の時間は子供達だけで無く、「まちの先生」も本当に楽しそうに見えた。

私は今回の三谷地区内の調査中、子供も含めて若者を見かけることがほとんど無かった。学生や仕事をもつ人はその多くが地区外へ出ているようであり、実際、「息子は今金沢で働いているから一緒に暮らしていない」などと話す人は多かった。G氏(50歳代、女性)は「子供は2人とも金沢の大学に通っているが、そう遠くないのにお正月やお盆もこっちに帰ってこない。」と話している。親や祖父母などにとっては、自分の子供と一緒に暮らしていきたいのは当たり前であるし、できれば将来三谷地区に戻って自分達の家を支えていって欲しいと思っているだろう。実際に地区外から戻ってきて三谷地区で家族と生活を始める人もいるだろうが、現在の高齢化が進んでいる状況から見ても、地区外へ出たまま生活をしている人のほうが多いと考えられる。ここから、二つ目に「ふるさと活動」に大人たちが熱心に取り組むようになってきているのは、このような将来子供達が三谷地区から外へ出たまま帰ってこなくなるのではないかと、自分達が高齢者となった時も家を支えてくれないのではないかと、といった危機感や不安が背景にあると推測される。また、現実には仕事などの関係で難しいだろうと分かっているにもかかわらず、将来、自分の子供達が「ふるさと」を想って帰ってき

てくれることを願ってのものとも思える。この「ふるさと」とは、学校や地域の活動では実際の三谷地区という「ふるさと」が対象とされているが、子供達の親や祖父母にとってそれは「家庭」を意味しているのかもしれない。

また、話を聞いていると、「地域で子供を育てるという考え方や活動はすばらしいと思うが、自分が実際に参加することは難しく、なかなかできない」というように、現段階では活動自体には賛成だが、自分が参加するとなると大変と言う人が多い。このことにはⅢでも少し触れたが、活動自体によほど熱心でない限り、「自分の子供」といったような関係が無いと活動にまで踏み込めないという理由がある。また子供のいる家庭であっても、働き手が少なく仕事が忙しい親が多いので、やはり日中はできるだけ学校に子供を任せたいし休日はゆっくりしたい、といった思いがあるのではないか。しかし、三谷小学校が取り組んでいる地域と密着した活動に賛成の人々が多いのは事実であり、三谷地区の人々は、自分達が暮らしてきた地区自体に誇りを持っている。これまで述べてきたような様々な活動でも、負担にならない程度の協力からであれば、より多くの人々に受け入れられるだろう。そこから「地域で子供を育てる」活動もさらに活性化し、三谷地区全体に根付いていくことにつながるのではないかと期待する。